二〇二五年度

晃華学園中学校

第二回 入学試験問題

【国語】

時間：四〇分
配点：八〇点

答えはすべて解答用紙に記入すること。

問題は次のページから始まります。

一 次の文章は、中学三年生の詩織（わたし）が、友人の千秋と、同級生の璃子の家に遊びに行った時の場面です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

璃子の家は閑静な住宅街にある立派な家だった。門柱にはお洒落な照明がのっていて、夜になったら、これがやさしい灯をともすのだろうと想像すると、うっとりとなる。道々、千秋が話してくれたことに、なるほどとうなずきもした。

「璃子の母さんさ、ケーキとか、焼き菓子とか、自分でつくっちゃうの。それがびっくりするほどうまくてさ、子どもごころに感動したわー。ここんちの子になりてえって、本気で思ったもん。詩織んちの母さんもつくったりする？」

「そんなの一度もないよ」

「だよな。ふつうないよな。璃子んちの母さんが特別なんだよな」

璃子とは小学校の三、四年が同じクラスだったとも教えてくれた。

門柱にあるインターフォンを押す。

「あのー、すいませーん」

セールスマンみたいな千秋の口ぶりに笑いそうになる。

わたしたちの姿がカメラでわかったのか、目の前のインターフォンから璃子の声が聞こえた。

「そのまま門を開けて入ってきて。いま玄関開けるから」

通されたリビングは広くて、きれいで、小さな男の子が絨毯の上で積み木遊びをしていた。なにをつくっているのかはわからなかったけれど、小さな子がつくったとは思えないほど大きかった。

「ゆう、お姉ちゃんの友だちが遊びに来てくれたよ」

璃子が男の子に話しかける。

「こんにちはー、きれいなお姉さんが来たよー」

近づいたのは千秋だ。

ゆうくんは、あっあっと笑いながら、手でたたくようにして積み木を崩し、絨毯の上に廃墟をつくった。

「これはなんだ？　空飛ぶイカだー」

千秋は、廃墟のなかから三角の積み木を拾い上げて飛行機のように飛ばし、その飛行機をつかもうと、ゆうくんが手を伸ばす。千秋はだれとでもすぐに仲よくなる才能をもっているが、①こんな小さな子まで守備範囲だったとは。

「ここにポットとお菓子を置いておくから。璃子、そっちは危ないからこっちでね」

璃子のお母さんがダイニングテーブルにお茶の用意をしてくれていた。素敵なおとなの女性とはこういうひとのことを言うのかな。やわらかいブラウスが似合っていて、わたしの母とはずいぶん違った。

「おじゃましています」

わたしたちは、ゆうくんを囲むようにすわっていたから、すわったままで頭をさげた。もっとちゃんと挨拶をしたほうがいいだろうかとも思ったけれど、

「ママ、もういいから。だいじょうぶだから」

と、璃子がお母さんを追い出すようにし、わたしたちに向かって、にっと笑った。②なんとなく不敵な笑み。

わたしたちはおしゃべりを始めた。

ゆうくんは千秋のひざにすわって、三角の積み木を動かしている。空を飛ばしているつもりなんだろう。

「ゆう、すっかり千秋になついちゃったね」

璃子がうれしそうに言う。

「この子は見る目があるよ。だれがいちばんきれいか、わかってる。ねえ、わかってるよねえ」

千秋がゆうくんのほっぺをつつき、ゆうくんがくふっと笑う。

「あのね、本当のことを言っていいんだよ」

わたしはふたりに聞こえるように、ゆうくんにささやいた。

「この子、いくつだっけ」

千秋がきく。

「二歳。もうすぐ三歳になるけど」

「ふうん、二歳か」

千秋の手がゆうくんの頭をなでる。

わたしは、こんな小さな子にどうやって接したらいいのかわからなくて、千秋の隣でただ見ているだけだった。
そのうちゆうくんは千秋のひざからおり、璃子に向かって手を伸ばした。ああっ、うううっ、とさかんに話しかける。璃子には、ことばにならないそのことばがわかるのか、抱っこなの、とゆうくんを引き寄せ、お尻に手をあてがって、わたしたちのほうを向くようにひざに乗せた。うまいものだ。ゆうくんは、うううっ、あっあー、手を伸ばしたりにぎったり、ご機嫌だった。
わたしたちは、わたしたちのおしゃべりをした。けど、そうしながらも、わたしはゆうくんを観察した。ひとりで、さっきの積み木をつくったのだとしたら、すごいと思う。その一方で、もうすぐ三歳なら、もっとことばを話すような気がした。どのくらい話すかはわからないけれど、うううっ、あっあー、だけじゃない気がする。弟はすこし変わってるかも、と璃子が言ったのはこのことだろうか。
ゆうくんと目が合ったから、笑いかけてみた。
うそっ。わたしのほうに来ようとする。どうしよう。ほんとうに来た。両手をわたしに向けて差し出すから、脇の下に手を入れて抱き、璃子をまねてくるっとひざの上に乗せた。あ、いいかも。この重さ、いいかも。重すぎることはなく、でも生きものを感じさせる重量感があった。ゆうくんのお尻からわたしの腿に、ほかほかとした体温が伝わってくる。わたしよりすこしだけ高い体温。ああ、小さい子って、こんな感じなんだ。ゆうくんがのけぞると、頭がわたしのあごを押す。でも、それもかわいい。髪の毛なんか、さらさらだ。ぐふふ、ぐふー、あー、うー、ぐふー、意味のわからないことばをつぶやくゆうくんの足にふれながら、おしゃべりを続けた。
ゆうくんが立ち上がろうとしたから、立ち上がらせた。
「いたたたた」
髪の毛をつかまれた。こめかみのあたりの毛を、ぎゅっとにぎって離さない。
「ゆう、そんなことしちゃ駄目」
璃子が言う。
「ゆう、駄目だってば。遊んでもらえなくなるよ」
璃子の声はのんびりしているようにしか聞こえない。
ああ、いつもの三つ編みにしてくればよかった。
「まいった、こーさーん」
おどけて言ってみた。でもゆうくんは、ますます強く引っ張る。ぐふー、ぐふふ、ぐふー。半端じゃなく痛い。

「お願い、この子なんとかして」
③璃子に訴えると、璃子の目がすうっと冷たくなった。
なぜそんな目でわたしを見るの？
「ゆうくーん、あたしと遊ぼう」
横から千秋がゆうくんを抱き取り、髪の毛が持っていかれた。
「いたたたっ」
「おお、ほんとだ。詩織、何本か抜かれたよ」
ゆうくんの手には、わたしの髪の毛があった。
「ごめん、詩織。でも、ゆうには悪気ないから」
璃子があやまる。
「うん、平気、平気」
でも怖かった。
すぐに千秋も髪の毛を引っ張られた。
「んなことすると、こうしちゃうぞ」
千秋はゆうくんをくすぐった。くすぐられたゆうくんは髪の毛から手を離し、からだをよじって、またつかもうとする。千秋はショートヘアだから、ゆうくんはつかみにくそうで、それでもなんとかつかんだ髪の毛を離すまいとする。まるで小さな［A］だ。
ゆうくんをくすぐる千秋の手がとまった。
なにが起こったのか、すぐにはわからなかった。ゆうくんが千秋にひそひそ話をしているように見えたのだ。でも違った。頬にかぶりついていた。
「璃子、たいへん」
璃子がゆうくんを千秋から引き離そうとしたけれど、ゆうくんは千秋の髪の毛をにぎり、頬にかぶりついたままだった。
「なにもしないで」
千秋が鋭く言う。

わたしはリビングのドアを開け、大きな声で呼んだ。
「おばさーん」
千秋の頬には赤い歯形が残っただけで血は出ていなかった。璃子のお母さんは氷水で冷やしたタオルを千秋の頬にあて、家の電話番号をたずねた。
「おうちのかたに、おわびしなければ」
「このくらい平気です。もう痛くないし。あたしこそ、ゆうくんのいやがることをやっちゃったんだと思います。すいません」
千秋は頑(がん)として自分の家の電話番号を教えなかった。
「もし、なにかあったら、かならず言ってちょうだい。痛くなったり、熱をもつようだったり、なにかあったら、かならず」
なにごともなかったように積み木で遊ぶゆうくんを、璃子のお母さんはとても疲(つか)れたような目で見た。そして、ゆうくんを抱き上げると、リビングから出ていった。うぐぐ、ああっと、むずかるような声が廊下(ろうか)の奥(おく)から聞こえる。
「ごめんね、千秋」
璃子の目が真っ赤だった。
「あたしは平気だって。④んなことより璃子、だいじょうぶ？　きついんじゃね？」
そのひとことで、璃子の目から涙(なみだ)が落ちた。
そして涙にぬれた顔をあげると、わたしに向かって言ったのだ。
「⑤詩織がゆうをあんな目で見たからだよ。だから、こうなったんだよ。わかってる？」
ゆうくんを見ていたことを見られていたことに、どきりとした。
でも、わたしのせい？
なぜ？
なぜ、そんなことを言われなきゃならないのか、わからない。ひどくないか。
「詩織のせいじゃないって。あたしのせい。あたしが調子こいて図に乗ったんだ。ごめん」
千秋があやまったけれど、もちろん千秋のせいでもない。

家の奥から聞こえるゆうくんの泣き声がひときわ大きくなり、わたしたちはいたたまれず、璃子の家を出た。

（中略）

その週の土曜日、わたしと千秋はふたたび璃子の家を訪ねた。

リビングに入ると、璃子のお母さんに迎えられた。

「どう？　もう痛くない？」

璃子のお母さんが真っ先にしたことは千秋の頬を確認することだった。

「はい、もうすっかり」

千秋は指で頬をつついた。

「よかった。ご両親はなんて？　心配されたでしょう？」

「ぜんぜん」

「そんなこと言って」

「うち、下に三人いて、小さな傷はしょっちゅうだから、気にしている余裕なんかないっつうか、唾つけときゃ治るって感じで」

千秋はでへへという顔をし、お母さんもつられたように笑みを浮かべた。

ゆうくんは、このまえと同じように積み木でなにかをつくっている。

「おっきなの、つくってるなあ」

千秋がゆうくんに近づく。

璃子も璃子のお母さんも、はっとしたのがわかった。

⑥わたしは身をかがめるようにして、千秋より早くゆうくんに近づいた。

「なにつくってるの？」

髪は三つ編みにして後ろに垂らしてある。たとえ引っ張られても、だいじょうぶ。

うううっ、あっああ。ゆうくんは、ことばにならないことばを発し、積み木をひとつとって、わたしにくれた。

これ、どうしたらいいんだろう。

「先にこっちで、お茶をどうぞ」

璃子のお母さんが［　I　］ように言ってくれたから、わたしは積み木をそこに置いて、ゆうくんに伝えた。
「あとでね」
（中略）
「ママ、疲れたんじゃない？　すこし休んだら」
「そうね、そうしたほうがいいかもしれない。でも、ゆうはママがみなきゃね」
璃子のお母さんはゆうくんに近づき、抱き上げようとしたが、ゆうくんは身をよじってぐずった。うううっうう。わたしにもわかった。いやだと言っているんだ。
「ママ、ゆうはわたしがみるからいいよ」
「そうはいかないわ」
璃子のお母さんが、いやがるゆうくんを無理に抱き上げたときだ。ぎいあああああっ。子どもの甲高（かんだか）い声がリビングをいっぱいにした。耳をふさぎたくなるような声だ。その声に負けないように璃子が声を張った。
「ママ、ゆうはここにいたいんだよ。積み木がしたいんだよ。わかんないの？　だいじょうぶだって、わたしがちゃんとみるから」
璃子のお母さんは目をぎゅっとつぶって、ゆうくんを絨毯の上に置いた。
「じゃあ、お願い」
凄（すさ）まじい泣き声をあげたゆうくんだったが、自分の願いがかなったのがわかったのか、あきれるほどあっさりと泣きやんだ。そしてわたしのところに、とことことやってくると、積み木を、わたしの手のひらにのせた。
なにを要求されたのか、すぐにはわからなかった。
うううっ。
思い出した。ケーキを食べるまえに約束したんだった。あとでね、と。あのひとことを憶（おぼ）えていたのか。
「どこにしようかな、どこがいいかな」
ゆうくんがつくっているのは塔（とう）のように見えたから、塔の上にレンガをひとつ積み重ねるみたいに置いた。
ぐふ、ぐふふう。

ゆうくんが、わたしを見上げ、うれしそうに笑った。
よかった。
二個目の積み木を渡されたらどうしようと思ったけれど、それはなく、ゆうくんはひとり遊びに戻っていった。
小さな子と遊んだことなどなかったから、こんなものなのかどうかはわからなかったけれど、ふしぎな感覚が残った。ゆうくんを小さな子どもとは感じなかったのだ。ひとりの人間とやりとりをした感覚があった。
璃子に小声で伝えた。
「ゆうくん、ことばをわかってるね」
「なんでそう思うの？」
「わたしが、あとでね、と言ったの、憶えていた」
璃子がじっとわたしを見る。
「ほんとうに、ゆうが、ことばをわかっていると思う？」
「うん、思う」
ゆうくんとのやりとりを詳しく教えた。
璃子の顔に、なんとも言えない表情が浮かんだ。まだサンタクロースの存在を信じていたころ、枕もとにプレゼントがあることに気づいたときのような、驚きとうれしさがないまぜになった顔。⑦璃子がこんなに無防備な顔をわたしに見せてくれたのは、初めてかもしれない。
「ふたりとも、なにひそひそやってんの。早くネットフリックス観ようよ」
千秋がせっついてくる。
「はいはい、わかった。これ抱いて」
璃子がソファーからクッションをとってわたしたちにくれたから、わたしたちはそれをお腹に抱いてテレビの前にぺたりとすわった。なにを観るかで大いに悩み、結局、映画館で観ようとしていたヒーローものの作品の前作を観ることにした。そうすれば、映画館で新作を観るとき、いっそう楽しめると。
ゆうくんがぐずると、映画をとめて璃子が相手をし、ゆうくんが璃子ではなく千秋やわたしを求めれば、わたしたちが相手をした。

髪を三つ編みにしていたせいか、髪の毛を引っ張られることはなく、ぐずりそうになると、すぐに璃子が抱き取ってあやしてくれた。そしてゆうくんが積み木遊びに戻れば、わたしたちも映画の続きに戻る。そんなことを二度ほど繰り返すうち、ゆうくんは千秋のひざで眠り始め、璃子がタオルケットをかけてやった。

そうやって、わたしたちは最後まで映画を観た。

ゆうくんはまだ眠っている。

「寝ているときは［　B　］なんだけどね」

璃子が寝顔をのぞき込む。

「うん、［　B　］だな」

なつかれている千秋は、うれしそうだ。

「でも、泣いたら最悪だよ。ゆうの声、聞いたでしょ。あれが始まっちゃう」

璃子が顔を思い切りしかめる。

確かに、あの声に慣れることはできないだろう。

こんなにかわいいんだけどね。

その日、璃子のお母さんが出てくることはなかった。

璃子とわたしの関係が変わった。

親しくなったのだ。

（森埜こみち『彼女たちのバックヤード』）

問一　――線部①「こんな～守備範囲だったとは」とありますが、この時の「わたし」の気持ちはどのようなものですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　千秋はだれからも嫌われることのないように、どんなときも明るくふるまおうとしているので気の毒に思った

イ　千秋が璃子と仲よくなるために、弟の「ゆうくん」を手なづけようと努力しているようで嫌気がさした

ウ　千秋が散らばった積み木で「ゆうくん」がけがをしないように、その場から遠ざけているのに感心した
エ　千秋はもともとだれとでも仲よしになれるが、小さな男の子の気を引くこともできるのに驚いた

問二　――線部②「なんとなく～笑み」とありますが、この時の「璃子」は「わたし」にはどのように見えたのですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　実をいうと詩織のことが気に入らない璃子は、親がいないすきに詩織を困らせてやろうとしている
イ　うっとうしい母親を遠ざけ、自分たちだけでゆっくりおしゃべりがしたくてわくわくしている
ウ　母親を追い出すことで、自分のほうが母親よりも強い立場にあることを示せて優越感にひたっている
エ　「ゆうくん」といっしょに過ごすことで、自分の大変さを二人に分かってもらえるかどうか気にしている

問三　――線部③「璃子に～冷たくなった」とありますが、それはなぜだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　詩織はそもそも子どもが苦手なのに、じっと見つめたり笑いかけたりして「ゆうくん」を誘ったから
イ　「ゆうくん」がいろいろと話しかけているのに、詩織は無視をしておしゃべりを続けていたから
ウ　詩織が「ゆうくん」を手に負えない子どもだとあきらめ、相手をするのをいやがっているのがわかったから
エ　詩織が髪型を三つ編みにしなかったことが原因なのに、まるで「ゆうくん」の方が悪いような口ぶりだったから

問四　［　A　］と［　B　］（二か所あります）に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものはどれですか。次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　A 狼　B きつね　　イ　A 怪獣　B 天使　　ウ　A ヒーロー　B ぬいぐるみ　　エ　A 悪魔　B 神様

問五　――線部④「んなことより～きついんじゃね？」とありますが、なぜ「千秋」はそう言ったのですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　機嫌が悪くなると手が付けられなくなる「ゆうくん」の世話で、璃子が大変そうだったから
イ　自分にけがをさせた「ゆうくん」の代わりに責任を感じている璃子が気の毒だったから
ウ　詩織に「ゆうくん」を変な目で見られて傷つけられた璃子がかわいそうだったから
エ　友達を家に呼ぶと「ゆうくん」にじゃまをされて、友達が璃子から離れていくと思ったから

問六　――線部⑤「詩織が～見たからだよ」とありますが、「詩織」は「ゆうくん」をどのように見ていたのですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　自分よりも「きれい」ではない千秋の方になついた「ゆうくん」に失望し、がっかりしていた
イ　小さな子どもに対してどのように接していいか分からず、笑顔でごまかそうとしていた
ウ　大きな積み木を作ったのならすごいとは思うが、年齢（ねんれい）の割にことばを話せないようだと観察していた
エ　しょせんは小さな子どもに何を言っても分かるはずがないと、「ゆうくん」をみくびっていた

問七　――線部⑥「わたしは～近づいた」とありますが、それはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　璃子の母親にこれ以上心配をかけないように、今回は千秋の代わりに自分ががんばると決めていたから
イ　千秋が再び「ゆうくん」にかみつかれないように、自分が代わりに相手をしようと思ったから
ウ　千秋が、前回かみつかれた仕返しをしようと思って「ゆうくん」に近づこうとしたのが分かったから
エ　璃子に前回責められた反省から、千秋のように小さな子どもと気軽に接するように心がけたから

問八　［　Ⅰ　］にはどのような言葉が入りますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　水に流す　　イ　角が立つ　　ウ　横車を押す　　エ　助け舟（ぶね）を出す

問九　――線部⑦「璃子が～見せてくれた」とありますが、それはなぜだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　「わたし」も「ゆうくん」がことばを理解していると気づいてくれたから
イ　「わたし」が自分の家族のことをばかにしていないことを知り、ほっとしたから
ウ　「わたし」が人間どうしにはことばなどいらないと考えていることに共感したから
エ　「わたし」も「ゆうくん」と人間らしいやりとりができるほど成長したのがわかったから

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、本文中の「表」は省略します。

本文の著作権二次利用の許可が下りないため、掲載不可。

（平賀緑『食べものから学ぶ現代社会――私たちを動かす資本主義のカラクリ』）

問一　――線部①「世界が～陥る」とありますが、それはなぜだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　ロシアには人口が集中しているだけでなく、ウクライナとの長引く戦争で多くの食料が必要になったから
イ　小麦は限られた地域から輸出されており、ロシア、ウクライナはその地域の中に含まれているから
ウ　小麦の売価を上げるために、ロシア、ウクライナによる意図的な生産調整がおこなわれたから
エ　ロシアとウクライナは世界的な気候変動により大きな影響を受け、小麦の生産量が激減したから

問二　［ア］に当てはまると考えられる言葉を十五字以内で書きなさい。ただし、「卵」、「籠」という言葉を必ず用いること。

問三　――線部②「その集中は～都合が良かった」とありますが、それはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　食料の種類や品質が均一となることで、集荷や管理が容易となり、利益が上がるから
イ　地域、作物の集中には様々なリスクがあるため価格の変動が激しく、多くの利潤が期待できるから
ウ　生産や輸送のコストを下げることができるので、多様な食物を提供することができるから
エ　都市部の工場に労働者を集めるための食料が、安定して供給できるようになるから

問四　――線部③「贅沢」とありますが、なぜ「贅沢」だといえるのですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　保存や加工に費用がかかるものが含まれているから
イ　生きるのに必ずしも必要なものではないから
ウ　他の人より多種多様なものを食べることができるから
エ　近隣にないものは輸送費が上乗せされて高価になるから

問五　――線部④「小麦が～経緯」とありますが、この「経緯」はどのようなものですか。次のア～エを順番に並べて、記号で答えなさい。

ア　小麦の製粉技術向上によって小麦粉の品質が改良され、長距離の輸送が可能となった
イ　外国から多くの小麦が輸入され、輸出側の農家の大量生産が始まった
ウ　小麦粉を使った加工食品の大量生産が可能となり、それを販売する流通業、小売業が発展した
エ　産業革命により農村から都市部へ人が移住したことに伴い、多くの食料が必要になった

問六　［a］に当てはまる言葉は何ですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　庶民の贅沢品　　イ　工場主の台所　　ウ　労働者の胃袋　　エ　農村の特産品

問七　［Ⅰ］、［Ⅱ］に当てはまる言葉は何ですか。次のア～エの中から最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ
ア　多くの種類の作物を大量に栽培するようになる
イ　限られた場所で、できるだけ多くの作物を栽培する工夫をする
ウ　1～数種類の作物を大量に栽培するようになる
エ　様々な場所で、それぞれの気候にあった作物を栽培する

Ⅱ
ア　自分で栽培したものは自分で食べなくてはいけない
イ　なるべく近くで早く食べるべき
ウ　小麦は製粉せずに食べなくてはいけない
エ　その日のうちにパンに加工するべき

問八　――線部⑤「競争しながら～追求する」とありますが、これに当てはまるものはどれですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　単価が高くなっても、できるだけ高品質の商品を作り出そうとする

イ　消費者のニーズに合わせた商品を大量に生産し、原価を下げようとする

ウ　特定の購買層にむけた商品を扱い、安定的な売り上げの確保を目指す

エ　高額な商品を扱うことで企業イメージを上げ、利益の拡大をねらう

三　次の①～③の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

①生活にシショウが出る　②カイキョを成しとげる　③彼女は金メダルを取り、キショクマンメンだった